

2011年(平成23年)
8月号(No. 795)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

日本山岳会と、先人に学ぶ「自然保護」

田村義彦

日本山岳会の長い歴史のなかで、「自然保護」に貢献した実績は大きなものだったと思う。しかし、今回の定款改定により、その「自然保護」が「山岳環境の保護及び保全」に変わった。自然保護運動に長年かかわってきた田村会員に、日本山岳会と「自然保護」の歴史を振り返ってもらった。

日本山岳会は創立以来百数年、登山団体として数々の業績を残してきたことは今さら言うまでもない。しかし、本会には登山だけではなく、他にいくつかの目的があり、その一つに自然保護がある。定款にある自然保護の歴史を振り返ってみよう。

「自然愛護の精神の昂揚」を追加

1941(昭和16)年、定款第3条に、会の目的として「自然愛護の精神の昂揚」が追加された。會長に木暮理太郎、副會長に横有恒、西堀栄三郎、理事には冠松次郎、今西錦司ら、評議員には松方三郎、田部重治氏ら大先輩の名が連なっている。

田口二郎氏が「山への土着的愛情」の人と評する木暮會長が、大

目次

日本山岳会と、先人に学ぶ「自然保護」	1
マスターのナンゴ・バルバート登頂の真摯に迫った映画「ヒマヤ」	4
山岳画展「山岳に焦がれた男たち」	5
第31回日本登山医学会盛況裏に終了	6
支部だより	7
北海道支部/秋田支部/埼玉支部/東九州支部	
活動報告	10
集會委員会/自然保護委員会	
図書紹介	12
図書受入報告	13
会務報告	14
ルーム日誌	18
会員異動	18
新入会員	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

平洋戦争開戦の年に自然愛護を追加したのは、国土の自然への深い愛があつてのことであろう。

自然保護委員会の設置

特記すべきは、1964(昭和39)年に松方三郎會長の発議で自然保護委員会の設置が理事・評議員会で決定したことである。委員長は松方會長が兼務し、委員には武田久吉、神谷恭、藤島敏男、日高信六郎、深田久弥、渡辺公平、千家哲磨、村井米子氏らの錚々たる名前が連なっている。

生涯を貫いて自然保護に尽力した松方會長は、その前年の全国支部長会議のあいさつのなかで、三つの願いの一つとして、もう少し広い意味での対社会的活動としての自然保護に言及している。会

報『山』223号には、われわれの会は日本の山岳会なのだから、何としても日本の山をちゃんとした山にしておかねばなるまい。日本山岳会の土台は、やはりこうしたことに対する明確な考え方の上、しっかりと根をはっていかなければならぬ、といった主旨の日本山岳会の基本姿勢を述べている。

さらにその2年後に、定款を改正して、第4条「目的」に「自然保護活動の推進」が追加された。會長は松方三郎、副會長は三田幸夫、渡辺公平、理事に元會長平山善吉氏の名がみえる。松方會長はじめ諸先輩の熱意の結晶として、自然保護活動が明確に規定されたのである。

ところが、まさにその「自然保

護活動の推進」が、45年を経た本年6月の総会において削除されて、「山岳環境の保護及び保全」に置き換えられたのである。

創立以来、真摯に自然破壊に異議申し立てをしてきた先人の純粋な気持ち pensando とき、われわれ後輩が深い理由と必然性のないまま削除することが許されるのか。慙愧に堪えない。

先人に学ぶ

日本山岳会の自然保護の歴史は『山岳』第六十九年・七十三年に渡辺公平氏が、『日本山岳会百年史』に松本恒廣氏が詳述している。若干重複せざるを得ないが、先人の気魄あふれる原文を抜粋する。

創立発起人の一人である武田久吉氏は、1926(大正15)年発行の『山岳』第二十号第二号に「日川溪谷の濫伐と保護運動」を寄せている。

「雑木林の価値低いものを、十ヶ年内外に皆伐して、価値ある檜の造林をして居る！ 知らず、これが現代の科を應用した、最良の方法と言へようか？ (略) 何とそれが原始的な方法であることよ！

造林學に於て最も研究を積むだ國有林に於ては、擇伐と天然更新とを著々として各地に實行して居る。山林の改良は、天然と合理的人為と相俟つて初めて遂行出来るもので、國土と樹種とを全く異にする本邦に於て、何ぞ獨逸流舊式山林學の糟粕を嘗むるの要ありや。日本は須らく日本流山林學を樹立すべきである」と断じている。

ところが、それから一世紀近く経た戦後になつて、武田氏がほめた國有林において、国は広葉樹の自然林を皆伐して杉・檜を植栽する拡大造林政策を行なつた。「国敗れて山河あり」ならぬ、「国栄えて山河なし」にしてしまつたが、泉下の武田氏が知れば激昂するであらう。

1935(昭和10)年発行の会報『山』50号は、まるで自然保護特集号である。巻頭に「尾瀬水電と富士ケーブルカーの問題」と題する日本山岳会の主張を掲げる。

「我々は四十萬キロワットの電力よりも、居乍らにして富士山頂に達する安樂さよりも、懸け代へのない自然の保存を尊重するものであり、且又、國家百年の計に立てば當然斯く考ふべきものと確信し

て疑はないのである。産業の發達に寄與するとか科學的研究に資するとか云う遁辭の下に今日迄如何に多くの自然が破壊されたかを熟知する我々としては、此の決意は餘りにも當然の結論である」

「自然の破壊、無統制な機械文明の自然界への侵入に對しては、我が日本山岳會は断然反對であると云ふ一事を此の機會に天下に表明し幟旗を明にして置くことは望まじきのみならず、當然の義務でもある」

この方針を理事会で決定、渡辺公平氏は「理事たちの叡智と勇氣に脱帽する」と書いている。

続いて、初代会長小島烏水氏が「富士山ケーブルカー反對」と題して、激烈な反論を2頁半にわたつて展開している。

「日本では神道にしろ佛教にせよ、或は又修驗道にせよ、學問にせよ、或一個人の精神上感應得驗にせよ、昔から山岳から受けたところの恩恵は、恐らく他の國民に、比類のないものである、殊に富士山に於いては、一個の山といふよりも、神化された天上の淨土になつてゐる」として、「人間の居住地なる都會村落に於ては、便益第一主義

が許さるべきものであつても、一萬二千尺の高峰にして、且つ民族的信仰の名山、自然崇拜の道場に於ては、便益第一主義の上に、超然として、守るべき聖美は、身をもつて之を守らなければならぬ」

「日本民族の伝統と、文化精神において許されると思ふか」と怒る。そして、種々學術上の付帯利益をあげる説に對して「併し萬一、然り萬々一、ケーブルカーが架かないから、是等の學者たちが手も足も出ないと言ふなら、私は叫ぶであらう。學術の名を以て富士山を汚さんよりも、富士山の純潔を保つために學術よ、去れ、何となれば、多くの天然記念物保存事業は學術のために、為されている筈であるのに、今回の富士山の場合に限りて、學術は、天然記念物を破壊せんとするが故に」と結んでいる。

創立発起人の4人が博物學同志会の同人で自然科學に造詣が深く、山岳會規則第二条に學術研究を目的に謳いながらも「學術よ、去れ」と喝破できるのは烏水氏をおいて他にないであらう。文人にしてシエラクラブの理念を理解する烏水氏ならではの檄文である。

近年、人間が破壊したのだから人間に再生の責任がある、と詭弁を弄してさらに破壊を助長する傾向がみられるが、そのとき使われるのが科学である。「學術よ、去れ」は、いまでも立派に生きている言葉である。

続いて武田久吉氏は「風景地の保護と国民の自覚」と題して次のように書いている。少し長いが引用してみよう。

〔邦内他に代る可きものもない國寶の風致区域を、一種の事業の為に犠牲に供するが如きは、憂国者の座視するに忍びざる處であるが、或は目前の利益に捉はれたり、又は物質文明に幻惑されて、その事業がその地域を失うても尚國家に貢献し得るものと誤信し、國土に對する認識不足から、敢えて破壊を謳歌せんとする者がある。而も



自然保護に多大な貢献をした武田久吉

それが、日夜金銭上の利益のみを追うに汲々として、他を顧ること知らない事業家側のみでなく、國家擁護を主眼として國民幸福を計る可き立場にある官憲の間にさへ、是認されんとするは、寔に慨嘆す可きことでなくて何であろう。

近時政府並びに関係者は、日夜心労を敢えてする程の熱誠があるならば、貴重な國寶的地域の壊滅に對して、黙して立たないのは何故であろうか。彼等は斯くも我國土に對する認識に缺如しているのであろうか。心ある國民は須らく聲を旺にして國土擁護を叫ばなければならぬと痛感せざるを得ない。

日中戦争勃発前の時代的背景を考えれば、これだけの檄文を公表した日本山岳会の勇氣に敬服する。

しかし、戦後の高度経済成長期には、武田氏が事業者に對する監視を求めた「政府と行政」それ自体が自然破壊を主導したのである。

最後に松方三郎氏が「他山の石」と題して、へ自然の崇高がその胸に訴へる程の者であれば、マッターホルンを鉄道や昇降器で登る如きは冒流俗化以外の何物でもな

いことと考へるだろう」と断じている。

ケール建設計画は不許可になり、山岳会の反対運動は成功した。

日本山岳会の自然保護

このように見てくると、先人の自然保護活動は生態学に導かれた人間中心主義的自然保護論とはいささか趣を異にすることがわかる。先人は、歴史的宗教的文明論的洞察に基づく登山者の感性から、原生的自然の破壊に對して勇氣ある異議申し立てをした。その抵抗の基本は、国土への愛と日本山岳会の使命感である。日本古来の登山文化の流れを受けた発想で、現在のわれわれの心にも脈々と流れている。原生的自然にこだわる登山者であれば共感するであろう。後輩として先人に学び、非力ながらも継承していかねばならないと考へる。

「自然保護活動の推進」を定款へ

尾上昇会長は本年6月の自然保護全国集会で「皆様が行なっている自然保護活動は公益法人として最もふさわしい」ということは言

を待ちません。(略)自然保護活動の展開と山登りの実践という両輪が互いにあいまって、日本山岳会の事業活動の花が開くと思っております」とあいさつされた。「木の目草の芽」第93号)これが日本山岳会の現在の方針である。自然保護は削除どころかやらなければならぬことなのである。

また、総会では当時の副会長2人が発言された。藤本慶光氏は「議論が不十分というなら、最初からやり直すことになる」と、神崎忠男氏は「行政に振り回されないように、いままでも通りで行こう、ということをやってきた。会員の意見を吸い上げて変えられるところは変えればいい」と発言された(『山』794号)。

「自然保護」でなくても「山岳環境」でいいだろうといった大局観に欠ける近視眼的修辭によって軽はずみにも「自然保護」を削除したのは、後輩として僭越至極であると言わざるを得ない。

日本山岳会にとって自然保護は重要な活動である。先人の熱い想いのこめられた「自然保護活動の推進」が再び定款に謳われることを切に望む。

カルチャ―

メスナーのナンガ・パルバート登頂の真相に迫った映画『ヒマラヤ』

小泉弘

『ヒマラヤ』というあまりにも平板なタイトルからは、どんな映画なのかイメージしにくいですが、ドイツ登山界の執念の8000メートル峰ナンガ・パルバートを舞台に、1970年の遠征登山に基づいたドキュメンタリー映画である。

原作はラインホルト・メスナーの『裸の山 ナンガ・パルバート』（平井吉夫訳 山と溪谷社）。裸の山とは、この巨峰を畏怖する現地住民たちの呼び名である。

ラインホルトと弟ギュンターたちが生まれ育った南チロル、フィルネスの起伏に富んだ緑豊かなアルプと、その上に屹立するむき出しの岩峰群に囲まれた谷は、想像を遙かに越えて美しい。

教会でのミサの最中、神父の説教をよそに、教会の内壁を攀じ登ることを夢想する少年兄弟。そして長じてナンガ隊の隊員に選ばれて、2人でバイクにまたがり緑の谷の中を疾走し出発して行くシーン。また、弟を無事に連れて帰っ

てと祈る母親……など、別の映画を見ているかのようなとても美しい世界である。

一転して遠征隊出発の場面。隊員一同が勢ぞろいして隊長があいさつするシーンや、山岳会ルームでの激しい論戦のやりとりの場面になると、画面の色調とともに40年前のドイツ登山界の重たい空気が伝わってくる。

おそらくはアルプス山中でロケしたと思われる登攀シーンや、コルに立つて仲間絶叫する核心の場面などは、厳しい登山の雰囲気も伝わりよく撮影されているが、たびたび登場する冷凍室で撮影されたという兄弟のアップの場面は、リアルさに欠けていて、映画全体のリズムを壊し興を削ぐ。

登頂に成功したものの、やむなく未知のディアミール壁を下降せざるを得なくなつてからの映像は丁寧に撮影されていて、この谷の空気がよく伝わってくる。現地の人たちに発見、救出されていく半



ナンガ・パルバート登頂後のメスナーとギュンター

死のラインホルトの様子も同様に。

私たち山好きの人間は、メスナーのこと、地上最大標高差4000メートルのナンガ・パルバート最悪の「青いのろし」のこと、ディアミール壁下降のこと、弟の死、そして隊長との長年にわたる確執のこと……などなど、多少なりとも、漠然とながら読み聞きして知っては

いよう。山好きの人、ヒマラヤに関心のある人たちにとっては、ストーリーをたどることができ

たずに見る人たちにこの映画はどう映るのだろうか。

この映画のもう一方の主役は隊長のカール・ヘルリヒコッフである。カール・マルコヴィクスが演じるヘルリヒコッフが実に上手で素晴らしい。義兄メルクルの遭難死に発するこの山への偏執的な執念深さの狂気を見事に演じている。ドイツ、オーストリアのアルピニズムの戦前から続くある種の重たさ、暗さを伝えていて充分である。見る人の多くは、こういう人間とだけは登山をともにしたくないと思うのではないだろうか。

子どものころから優秀な兄の後を追いかけてばかりいた弟の心の内奥や、兄弟に子どものころから山登りを手ほどきした父親の像がもう少し描かれていたらという思いもした。

ラストに延々と続く黒い画面に白抜き文字のテロップ。兄弟にわずかに遅れて頂上に立ったクレーンとショルツの2人。この遠征の後、1人は山に逝き、ほかの1人は自殺したとナレーションは伝える。この山とドイツ登山界の何十年と続く呪縛の深さを思う――。

カルチャー

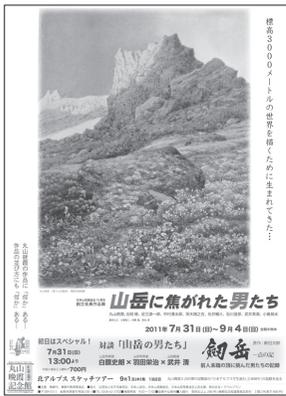
山岳画展「山岳に焦がれた男たち」

近藤善則

山岳会の集会室。入って右側に「白馬雪田」が掲げている。やや色あせた日本画であるが、この作者丸山晩霞が信州・祢津村(現・長野県東御市)出身の水彩画家であることを知ったのはごく最近のことだ。多少なりとも東御市に縁のある小生にとつて、東部湯の丸インターチェンジから東御市文化会館前を通過するとき丸山晩霞記念館の表示があることに気づき、

何気なく入館したのがきっかけだった。東御市が丸山晩霞の画業をたたえ、2006年に開館した施設だった。

その丸山晩霞記念館で現在山岳画の作品展が開催されている。これは丸山晩霞ら日本山岳会会員



の画家たちが中心となって昭和11年に創設した日本山岳画協会の創立会員の作品展「山岳に焦がれた男たち」というテーマで、晩霞を筆頭に吉田博、足立源一郎、中村清太郎、茨木猪吉、石井鶴三ら12人の作品が一堂に会する。創立会員の作品展が開催されるのは初めてのことといい、約90点の作品が2部構成でユニークな展示をしていた。

第一部では山岳の魅力、①山容の美しさ、存在感 ②溪谷や湖水の美しさ ③植物、高原、森林の美しさ ④展望や山頂の眺めの美しさ ⑤神秘性や仙境感の5つに分類し、創立会員たちがどのような理由で山に惹かれ、キャンパスと向かいあったかという、いままでにない視点で展示。

第二部では、北アルプスの山々のなかで作者の視点がどこにあるか推察しながら鑑賞できる配列をしたという。

山をとらえ、岩肌や山を取り巻く空気感や風の動きをもキャンパスに収める。そのため絶えず危険が伴い、作品の完成まで長い時間山中に留まるのが常で、風景画とは一線を隔てる。そのなかに作者の山への捉え方が重なり、同じ山でもまったく異なる作品になるので見ざるを飽きさせない。

この展示会開催は昨年末、日本山岳画協会の記念画集作成のために協会関係者が晩霞記念館を訪れたのがきっかけだったという。そのため調査や準備にかける時間がなく、不眠不休で多方面から作品を集め、ぎりぎりで開催にこぎつけたという。至らぬ点がたくさんあることをまずお詫びするという前置きながら、なかなかどうして迫力のある作品の連続にそんな前置きは吹っ飛んでしまう充実感だ。

また開催の初日7月31日は、特別企画として、白籓史朗(写真)、羽田栄治(映像)、武井清(絵画)という各分野の大御所三氏による鼎談が催され、それぞれの登山人生を語っていた。一瞬のシャッターチャンスを得るために山に向かう写真家。記録性と資料性を重点に困難に向かう映像作家。そして

至近距離で生の山と対峙しながら描き続ける画家。三者三様の「山への焦がれ」を知り、単なる絵画展ではない、何かを得ることができたような気がする。

丸山晩霞記念館は上信自動車道、東部湯の丸IC近くの東御市文化会館内にあり、山岳画展は9月4日まで開催している。夏山の帰りにでもぜひ立ち寄り、たどってきた山と描かれた山を比べてみてほしい。それぞれの「何か」が見つかると思う。

トピックス

第31回日本登山医学会盛況裏に終了

野口いづみ

6月11、12日に国立オリンピック記念青少年総合センター大ホールで、第31回日本登山医学会を開催した。学会は過去最高の400余名の参加者があり、盛況のうちに無事終了した。

1日目には、まず私が、会長講演「高所登山の医学——趣味と実益を兼ねて」で、自分が行なってきた高所関係の研究を紹介した。講演後、高濃度酸素溶存水について質問が多かった。

大城和恵氏は英国で認定山岳医ライセンスを取得した経験を紹介された。シンポジウム「登山のためのトレーニング」では、山本正嘉氏が中高年者のもつ問題点について、山地啓司氏が持久力について、石井直方氏が筋トレについて講演された。石井氏は最大筋力の30〜40%でのスロートレーニングが筋力をつけるが、加圧トレーニングは筋肉を痛める危険があると、指摘された。ランチオンセミナーでは、飯野靖彦氏が、登山と水分摂取に広範な話を楽しくされ

た。ウルトラマラソンの水分管理など興味深かった。経口補水液は、アウトドアで新たな展開が期待される。

午後は、有田秀穂氏が、登山とセロトニンについて講演され、ウォーキングや禅とセロトニンの関係などに触れた。登山は脳を活性化する上で大変有効とのことだった。続いて子島潤氏が、高所における睡眠時無呼吸の危険と治療法を講演された。緊急ワークシヨップ「大震災でみたこと・できること」では、増山茂氏が登山医学会の低体温症の啓発活動などの医療支援について紹介し、斉藤健太郎氏が支援体験を語った。

西澤匡史(公立志津川病院)と、石井正氏(石巻赤十字病院)は、応援医師たちとの医療体制の構築と共闘について紹介された。災害時の医療面のリスクマネージメントを知るとともに、石井正氏から提言された「自立支援」を促すべきという提言は、現地の声ならではという感があつた。展示会場で



シンポジウムで高所登山を語る篠崎氏(右)と河野氏

は、一般演題34題がポスター発表され、盛り上がりあつていった。懇親会には約160名が参加し、華やいであつた。

2日目は、船木上総氏が、トムラウシ山遭難を検証し、従来「低体温症」と異なる点、例えば突然発症する場合がある点などを指摘した。シンポジウム「セブンスミッター医療関係者は語る」で、篠崎純一氏がエベレストで酸素ボンベを使った経験、河野千鶴子氏が、56歳から8000m峰4座を登頂した経験などについて講演された。最後にランチオンセミナーで、前田宜包氏と神尾重則氏が山中でAEDを使って蘇生に成功した症

例を報告し、小菅宇之氏が2010年に激変した救急蘇生法について解説された。午後は、市民公開AED実技講習会と医療従事者向けの心肺蘇生実技講習会が行なわれた。

今回の大会テーマは、「実践的な登山医学をめざして」であつたが、一般向けに「楽しくて、ためになる」をコンセプトとした。ほぼテーマに沿った内容で実施できたとと思う。終了後にいただいた感想は、「わかりやすかつた」、「もつと以前から参加すればよかった」という声などがあつた。講師の先生方は内容の濃い講演をされ、聴衆は熱心に聴講されていたことに感謝したい。これからも、登山医学会が登山医学を発展させるとともに、安全な登山へ啓発活動を行なうよう願っている。

なお、併催された被災病院支援チャリティパーザーには、依頼した10企業すべてから商品を出していたのだが、完売することができた。売上義援金は約35万円であり、被災した志津川病院へPC2台とシュレッダーを寄贈した。供出をいただいた企業に篤くお礼を申し上げる。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

日高山脈に情熱を注いだ 画家・坂本直行資料展開催

7月1日から18日まで、札幌の秀岳荘白石店において、坂本直行資料展を開催した。会場には、知られざる戦前の新聞記事の陳列、支部蔵書となっている著書も展示した。多くの参観者が訪れ、展示物に見入っていた。

坂本直行(1906〜82年)は、日本山岳会『山岳』に通巻75号から89号(昭和6〜11年)まで、計15冊にカットを寄稿。入会したのは北海道支部が発足した昭和24年で、会員番号は3585番である。支部が再発足した昭和44年に年報『ヌプリ』の題字を揮毫、十周年記念の日本手拭に日高山脈の絵を描いてくれた。

没後30年前に、生前から出版を望んでいた自伝・紀行『はるか

なるヒマラヤ』(北海道出版企画センター)刊行を機に、資料展開催の運びとなった。

大正14年に北海道で初めて開催した版画展に11点を出版。これが新聞で評され、雑誌にも掲載された。昭和6年に晴林堂から『北海道山岳(登山案内)』を出版、日高山脈の項を執筆された。その後、未踏の山を次々と踏破され、新聞雑誌に記録を発表されている。

昭和11年に、広尾村下野塚の未開原野で苦難の開墾生活が始まった。それを心配した『山岳』の编者だった松方三郎、伊藤秀五郎、逸見眞雄から、「絵を送ってよこせ」と連絡があり、手もとにあった水彩と油絵の小品80点ばかりを送付した。その小品のほとんどが売り切れ、乳牛1頭の代金が送られてきて、友情の恩恵に浴したという。同年3月の会報『山』によると、中村清太郎が、「日本山岳

画協会の設立に就て」を発表、第1回展示会が日本橋高島屋7階サロンで10月開催とある。当時、『山』の発行は松方三郎、編集は逸見眞雄であることから、この催しに合わせて出展を求めたものと思われる。

昭和12年1月に北大山岳部がペテガリ岳を目指し、雪崩遭難で8人を失った。2月に、資金カンパのため札幌の三越百貨店で個展を開催。また、40年3月には、札幌川十ノ沢で沢田義一ら6人が雪崩で埋没。その時は、資金カンパを募るため松方三郎を招聘して札幌で講演会を開催し、入場料を寄付された。



多くの参観者が訪れた坂本直行資料展

昭和43年から52年まで北海道自然保護協会の理事を務め、大雪山縦貫道路計画反対運動に参加。そして、55年には、日高山脈横断道路建設反対のため上京。一生を通じて魅せられた日高山脈の保護を強く訴え、中止が実現した。

今回出版された著書『はるかなるヒマラヤ』の紀行には、昭和42年、ネパールを訪れて描いたヒマラヤの画と文も収められている。そして自伝では、少年時代から山登りに魅せられ、絵を描きはじめる山岳画家としての原点を見ることがができる。(高澤光雄)

秋田支部

春の里山山行——神宮寺岳、伊豆山縦走

神宮寺岳、伊豆山、双方とも高さは3000以上に足りないが、秋田から大曲方面へ向かう車や電車の右車窓に、三角錐が重なり合う形よい山である。また、仙北平野の奥、真昼岳山頂から見ると、雄物川と玉川の合流地点に突如として立ち上がる姿が特徴的である。

子どもの頃、伊豆山とその近くの松山にはよく行った。その時、

伊豆山と神宮寺岳に連なる尾根を「忍び長嶺」と教えられた。それは安倍一族が源義家によって松山に追い詰められた際、安倍の娘が敵方大将に心をとられ、密かに通い合った道が「忍び長嶺」、その先、姫神山に続く稜線が「笛吹長嶺」であると。やがて娘は敵方大将の子を産み、怒った父親により生き埋めにされる。その場所は、薬師神社から姫神山に登る左脇にあり、そこだけがなぜか大きな岩が積み重なっており、岩の間から今も女の泣き声が聞こえることがあるという。伝説とは知らず、子どもの私にとって、姫神山地の各所に、悲しく、かつ怖くて近づけない場所があった。今回の山行はこの悲恋に関する場所の一角である。

5月14日、当日の朝、地元である今野(昌)副会長、佐々木長秀会員は岳見橋の袂で私達を待っていてくれた。雨の予想にもかかわらず、その気配はなく滑る登山道の心配もなさそう。

登山口に車を置き、9時、神宮寺岳に向け出発。私だけは伊豆山から下山後、車を取りに行く運転者を送るため逆コースで登る。下山口に車を置き伊豆山へ。神宮寺



神宮寺岳頂上、嶽六所神社前で

岳との鞍部には東北遊歩道の朽ちた道標が立ち、かすかな踏み跡をたどり神宮寺岳に向かう。頂上に着くとひと足先に着いた本隊が記念撮影を行おうとしていた。

この頂上には嶽六所神社があり、雪解け前の3月初め、神宮寺町の住民が、大きく重い梵天を担ぎ、急な雪道を登ってくるという。その至難さはどこの梵天にも負けず、地元民の信心深さだという。頂上からの展望はあまりきかず、杉や雑木の間に北に流れる雄物川を望む。

神宮寺岳から伊豆山へは吊り尾根状で、下り中ほどまで今野副会長が刈り払ってくれた小さな道

を下り、「忍び長嶺」へと進み、伊豆山山頂に着く。

ここには伊豆山神社がある。鬱蒼とした杉木立ちに囲まれたこの神社も梵天が奉納される。花館住民により厳冬の2月、雄物川を渡り船で渡った梵天は、やがて伊豆山の急な登りにかかると、お酒の入った若い衆の鼻息は一段と荒くなるという。

伊豆山の下りは、車を回送する会員がひと足先に出発。山菜を横目に見ながら、滑る足に気を引き締めて下る。車の回送中、本隊の一行が山菜に気をとられているうち、一部の人が違う方向に下山したらしいとのハプニングを知らされる。

ただちに鎌田会員と後を追いかけた。神宮寺岳と雄物川の淵を回り、今朝の登山開始地点で昼食をしている2人にやっと追いつく。

松山で心配しながら待っていた佐々木長秀会員と再度合流し、昼食。その後、薬師神社に参拝、目にご利益ありと聞き、身に覚えのある人は真面目に手を合わせる。今日だけで、3回目の参拝。叶うことを信じて登山の安全と健康をお願ひし、今日の登山終了。

15時、地元会員の見送りを受け、帰路へ。(三浦眞六)

埼玉支部 設立2年、活動盛んな 埼玉支部

設立後2年近くが経過し、埼玉支部の活動も軌道にのってきた。山行だけに限ると、まず支部の有志が選定した埼玉50山がある。これは県内の有名無名の山を隈なく網羅したリスト。これを毎月登ろう、そして四季の山と称して季節ごとに県外に出ようというもの。この2つが支部の定例の行事で、他に臨時の山行が計画されることもある。ここで本年度に入ってから報告をしてみたい。

4月9日、支部総会後の記念山行として支部会員の人気ナンバーワンの両神山を選んだ。コースは白井新道経由、オーナーの方に案内してもらい、快適に登頂することができた。雨天の予想であったが降られることもなく、26人全員の満足な山行であった。

翌週の17日日曜日、埼玉県障害者スポーツ協会との共催で、奥武蔵の日和田山においてふれあい登

山を行なった。さまざまな障害をもった19人、それに付き添いやスポーツ協会の人、サポートとしてわれわれ支部会員が23人、合計64人のパーティが快晴の日和田山から新緑の山々を望み、遠くスカイツリーを見つけて歓声をあげた。

5月の50山は桜の名所秩父の蓑山。三角点がなかなか見つからず苦労したが、展望台の屋上に埋め込まれていた。参加14人。

6月は熊谷の観音山と行田の丸墓山。観音山は一等三角点の山参加7人。そして、この月前半のハイライトともいべき福島支部との合同登山を行なった。11日、バスを仕立てて18人、出発は雨の中だったが、浄土平で福島支部の方々の出迎えをうけ、鎌沼までの散策を楽しんだ頃には青空が見えてきた。その夜は、沼尻高原ロッジで田部井淳子会員も参加して賑やかな懇親会となった。

翌日は沼尻口からの安達太良山登山、福島支部から4人が同行された。このコースは登山者も少なく静かであるが、登山道のいたる所に地震による亀裂があり、危険な箇所も随所にみられた。予定どおり山頂を踏み、ロープウェイ

を利用して下山。福島支部の方々に見送られ帰途についた。

かくて、埼玉支部ささやかながら地道な運営が続けている。

(石橋正美)

東九州支部 第15回植村直己賞受賞記念 講演会を開催

東九州支部は、現在アラスカの中央アラスカ山脈を中心にして登山活動を展開しており、このたび第15回植村直己冒険賞を受賞した栗秋正寿氏を招いて、同氏の受賞記念講演会を開催した。

同氏は大分県出日田市出身であるため、県内の登山愛好家は言うに及ばず、ロマンと冒険を夢見る若者たちに誇りと勇気を与えるものといえる。このため、支部はこの若き登山家の栄えある受賞をたたえるとともに、広く一般の人々にも登山の楽しみや、登山文化の広がり、さらには人種や国境を越えた人と人のつながりの意義などを深めることを目的に、支部会員・会友以外に、県内の個別山岳クラブをはじめ、広く一般にも参加を呼びかけて、氏の体験談を

交えた講演会を催すことにしたのである。

この講演会には県教育委員会、県山岳連盟をはじめ地元マスコミ関係各社の後援を受け、さらに山のいで湯愛好会という山岳クラブの協力を得ての開催である。このクラブには、栗秋氏の叔父が所属しており、氏との具体的連絡などに多大なるご尽力をいただいた。

講演会は、7月9日午後2時から大分市府内町の「コンパルホール」に、聴衆約320名が集まり、約2時間にわたって同氏の講演に熱心に耳を傾けた。

栗秋氏は1997年から単独で冬のマッキンリー(6194m)



300名以上の聴衆が集まった講演会の会場

に挑み、翌年3月に史上最年少記録で冬季単独登頂を果たした。その後も冬のアラスカの山にこだわり続け、2007年にはマッキンリーより難しいと言われるフォーレイカ(5304m)に冬季単独登頂(世界初)を果たし、その後も、北米で80以上ある1万4000m以上の山ではもつとも登頂困難と言われているハンター(4442m)に冬季単独の挑戦している。これまで5回も挑戦しているが、まだ成功していない。

今回の受賞は、氏の限らない不屈の挑戦の姿勢と、危険に遭遇した場合の勇気ある撤退の精神が高く評価されたものと聞く。講演では、氏のこうしたアラスカの山への挑戦の体験と、リヤカーを引いてアラスカ大陸を南から北へ縦断した体験談を交えて、「アラスカ垂直と水平の旅」と題しての話であった。会報『山』6月(793)号に江本氏も記述している、酷寒の山中にあつて長期間滞在を可能にしている一つに、雪洞を掘つてのピバグがある。その意外なほどの快適な居住性の話は、参加者の興味をひき、終了後の質問も多かった。

(飯田勝之)



活動報告






日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です



集委員会

第9回土曜懇話会——尾上昇会長を講師に迎えて

7月2日14時より104号室において、尾上昇会長をお迎えして土曜懇話会を開催した。出席者は14名であった。話は山との出会い、日大山岳部での思い出、東海支部と海外登山など、いわば尾上さんの半生記ともいえるべき内容であった。

父親がアウトドア派で、小さいときからスキーやキャンプを楽しんできたが、山との出会いは高校時代である。高校時代は剣道部(れつきとした二段)だったが、そのときの剣道部の同級生に誘われて鈴鹿の山を歩き、夏は北アルプス、冬は木曾駒と出かけたのが、山との馴初めである。小中高そして大学、それも学部まで父親と一緒に、定めのように日大理学部に入學し、

体育会山岳部に入部した。

日大山岳部の8〜9割が理系の学生である。部は極めてリベラルで、当時の大学山岳部で当たり前だった「しごき」などはまったく無縁であった。水は飲み放題、1年生の荷物が1番軽く、2年生、3年生が荷物を持った。訓練のための山行はしない、学生らしい山登り・オールラウンドな山行を追求した。日大の水平思考といわれたように、スキー、岩登りなどの技術や方法を指導された。

4年生の時、学生らしい山登り・オールラウンドな山行の総決算ということで、大町から開通前のトンネルを抜け、ダム湖の水を渡った。そして針ノ木岳西稜の登攀を行ない、最後は笠ヶ岳まで縦走した。楽しい学生生活、よき山岳部であった。ちなみに、これまで誰もやったことがないと思うが、尾瀬でスキー合宿を行ない、平ヶ岳

までスキーで往復したこともよき思い出である。

4年生の時に、学生部の委員長を務めた。当時の大学山岳部にはツワモノがたくさんいた。今でも「三六会」と称して付き合いが続いている。自分の会員番号は6001番だが、じつは狙っていた6000番を、後から来た先輩に取られてしまった。

卒業後、ヒマラヤ登山禁止。印パ戦争の影響で、海外の対象がヒマラヤ以外になり、日大はグリーンランドに眼を向け、グリーンランド横断、北極点日本人初到達を達成した。これも日大山岳部の水平思考のなせる結果と思う。

その後、名古屋に帰り、会社生活に専念する予定であったが、縁あって36歳で東海支部長となり、「創始の心」を原点到数々の海外遠征隊を派遣し、近年の「K2西稜から西壁」「ローツェ」をはじめとして素晴らしい成果をあげることができた。自分はマカルーで病気になる、ハードな山は無理になったが、総監督として海外遠征を送り続けてきた。

日本山岳会の会長は、まさに青天の霹靂であった。改革は待った

なしであり、特に公益化についてはみんなの意見をよく聞き、JAC存続を第一義に出した結論であった。公益化に一定の目的をつけたので、山積する課題の解決に向けて全力で取り組むたい。具体的には、財政の立て直し、若い会員の獲得、事務局の強化、ルームの充実などである。皆さんのご協力をお願いする。

最後に、出席者とJACのこれからについて、ざっくりばらんな意見交換を行ない、終了となった。

(清登緑郎)

自然保護委員会

全国集会を福岡で開催

2011年の自然保護全国集会は、福岡支部との共催で、6月11日～12日の2日間、福岡で開催された。

1日目は、「西鉄イン福岡」で9時30分に開演した。今年は、3月11日の東日本大震災の影響で、参加者の減少が心配されたが、被災地の福島を含む20支部、および外部の一般参加の17名を含めて88名の参加があった。

午前の部の支部報告は、副島福岡支部長、富澤自然保護委員長のあいさつに続き、屋久島から駆けつけた日高十七郎屋久島町長の来賓あいさつで幕をあげた。

また、林野庁九州森林管理局からは、屋久島森林管理署長の木暮甲吉氏、国有林野管理課長の濱田秀一郎氏が午前中から参加された。

支部報告は昨年同様、各支部の代表から年間の支部活動状況、地域で起こっている問題点等についての報告があった。このような形で支部の方から直接、具体的な話を聞く機会は、参加者相互の情報交換と相互啓発の場になり大変有

意義であった。

また、本部の自然保護委員の下野綾子氏から、「過去の記録としての山岳写真の活用について」の概要の説明と写真提供の協力依頼があり、最後に、林野庁の濱田氏から感想のひと言をいただいた。

午後の全体集会は、東日本大震災で亡くなられた方々、およびわれわれの屋久島現地予備調査にも同行、この集会の基調講演をお願いし数々のアドバイスをいただきながら、3月30日に急逝された元福岡支部長の松本徂夫氏のご冥福を祈つての黙祷でスタートした。

まず、日本山岳会の尾上昇会長のあいさつの後、屋久島プロジェクトのリーダーである山川陽一氏（理事・自然保護委員）から、「屋久島問題の取り組みの経緯と課題」と題して、これまでの経緯と具体的な課題が報告された。

次に、広瀬敏通氏（日本エコツアーリズムセンター代表理事）の「エコツアーリズムとはなにか」と題した講演と続いた。広瀬氏が現在活動している東日本大震災の救援活動の報告に続き、本題のエコツアーリズムについての話は、基礎知識の習得と実践の難しさなどがよく

理解できる、たいへん有意義な内容であった。

続いて、「これからの屋久島を考える」をテーマにしたパネルディスカッションである。パネリストとして伊藤秀三氏（日本ガラパゴスの会会長、長崎大学名誉教授）、広瀬氏、井上晋（福岡支部自然保護委員、元九州大学助教授）、太田五雄氏（福岡支部・屋久島在住）、山川氏の5名が登壇。司会進行は、実行委員長の山本博氏が担当した。

自己紹介を兼ねた専門分野の話と屋久島との関連性についての話、増えすぎたシカの食害問題、ガイド問題など、屋久島の抱える個別問題について広範な議論がさ



「これからの屋久島を考える」をテーマにしたパネルディスカッション

れた。また、出席者との熱心な意見交換も活発に行なわれた。

全国集会では、具体的な問題がクローズアップされ、解決への方向性が示された。非常に有意義で、内容の濃い充実したものであった。そして、盛会のうち無事終了した。懇親会は18時30分から開始され、参加者は70名であった。旧交を温める輪があちこちでできて、和気藹々のうちに時は過ぎ、故・松本徂夫氏作詞の『坊がつる讃歌』を合唱してお開きとなった。

2日目の6月12日は、フィールドスタディである。梅雨時のこの時期、天気は生憎の本降りであり、予定していた宝満山登山は中止とした。代わって、全員で貸し切りバスを利用し、竈門神社、百間石垣、県民の森センター、水城、太宰府天満宮など、雨の歴史散策となった。福岡支部の方々の配慮により、楽しい一日であった。

最後に、副島支部長のもと、支部をあげて全国集会に向けてご協力くださった福岡支部の皆さまに、厚くお礼申し上げます。

（富澤克禮）



図書紹介

『はるかなるヒマラヤ 自伝と紀行』
坂本直行・著



2011年7月
北海道出版企画センター刊
B6判 326頁
定価 2520円

直行さんの文章は彼の絵とおなじく、男っぽくて歯切れがよい、そこに野性のユーモアが溢れている。

「登山者というものは、ロマンチストだと思うが、しかし目に映じた自然の美しさや魅力に心をふるわせ、涙を流すほど影の薄い、細かいロマンチストではない。

理由は簡単である。対象はあくまで冷徹無比の存在だからである。原野の生活についてもこれとまったく同じことがいえるだろう」

1936年、広尾下野塚に入植し、原野開拓に情熱を燃やして24

年、その間も、絵は彼の生活から離れることはなかった。ついに豊かといえるような生活は得られず、画業に専念するべく開拓地を離れ、豊似市街に、そして札幌のアトリエに移る。

開拓者の体力と精神は力強い絵を生み出した。東京での個展が大成功で、赤印のついた絵に何人も希望者が現われたとき、世話人だった大先輩は「直行は同じ絵を何枚でも描けるから、どんどん赤印をはってください」といって驚かせた、という逸話が残っている。

日高山脈に登った帰途、直行さんのお宅に寄って泊めてもらう山岳部学生も多かった。奥さんは飯の支度にも大変だったろうと思うが、一家はいつも明るく学生たちを迎えたといわれている。

日高で山岳部学生の遭難があると、かならずベースキャンプに登ってきて、あれこれと指示した

り、相談に乗ってくれた、得難い大先輩だった。
没後30年、高澤光雄氏によって彼の自分史と紀行が公刊された。直行さん、以て瞑すべし。
(木崎甲子郎)

『わが愛する山々』
深田久弥・著



2011年5月
山と溪谷社刊
文庫判 384頁
定価 1050円

深田久弥の山岳紀行『わが愛する山々』(1961年刊)を再編集し「ヤマケイ文庫」シリーズの一冊として復刊したものの。編集と解説の担当は大森久雄氏。「ヤマケイ文庫」は、古典から現代の最前線にいたるまで幅広い山岳書をカバーして貴重なシリーズだが、本書も、『日本百名山』以外に触れる機会が少なくなっている深田作品が読める有意義な企画になっている。

1957年から60年にかけて行なわれた山行「塩見岳のみ62年」の紀行23編を収録。志げ子夫人ら家族や友人たちを伴っての山登り

だが、深田の山との接し方、山登りのスタイルがよく現われている。全体をとおして伝わってくるのは、理屈抜きに「心底から山が好きだった」(「解説」)深田の姿だろう。「私の念願は日本のおもな山へ全部登りたい」(「初版あとがき」)という言葉は、素直にそのことを表現している。彼の先輩格にあたる世代はかなり議論好きだった。なぜ山に登るのかを問いかけて、やれ探検的登山だ、やれ静観的登山だと、言挙げに事欠かない。そこには、明治の開拓期世代やヨーロッパ・アルプスへの負い目のようなものもあったのだろうが、深田は、日本の山と日本らしい山登りをためらいなしに肯定することができた。そうした率直さ、屈託のなさがいかに好ましく説得力をもつ。旧制高校的なバンカラさを見せたり、平気で剽軽ぶりを披露したりと、現在の読者には意外とも感じられるような面もあり、それらも含めて深田の素顔や本心に接することができる。

また、当時すでに進行していた山の都市化と開発の影響に対して敏感に反応している。深田が山とのかかわりを強めていたこの時期

は高度成長期と重なっており、その過程でわれわれが壊し去ったものが何だったのか、改めて突きつけられる思いだ。深田は、破壊の跡を確認しつつも、それを糾弾するといふより、むしろ慈しみの感情を示そうとする。そうした山と向き合う深田の姿勢についても、ここで考えてみる機会が与えられるだろう。

大森氏の解説・注が現在の読者には適切でありがたい。「バックオーライ」などに注がついているのを見ると、時の隔たりに嘆息を禁じえない向きも多かろうが、こうして深田文学に直接親しむためのよすがが与えられたことを喜ぶたい。

(飯田年穂)

右橋崇至・著

『燕岳 四季へのついでない』



2011年4月
毎日新聞社刊 112頁
A4横長判 定価 3360円

1921(大正10)年、建坪24坪の「燕の小屋」の名称でスタート

した北アルプスの燕山荘が、来年創業90周年を迎えるにあたり、毎日新聞社から出版された書である。頂上からの優れた眺望、白く美しい花崗岩峰、砂地に咲くコマクサの大群落など、登山初心者からベテラン登山者まで幅広い層に人気のある燕岳を、岩橋崇至氏が本書のために撮影した約80点の作品で紹介した山岳写真集である。

岩橋氏は1944年に、東京・世田谷に、日本画家・岩橋英遠の三男として生まれた。慶應義塾大学、日本大学芸術学部で学んだ。日本大学在学中より写真家の山下喜一郎氏に師事、1970年よりフリーの写真家として独立した。学生時代から登山家としてのキャリアも数多く積み、78年には慶應OBで組織された「アルペンフェライン山岳会」によるヒマラヤ登山隊長を務めている。

写真活動は、山岳風景を好んで描いた父親のサポートのため、多く風景の資料撮影しつつ、国内をはじめ、ヒマラヤ、カナダ、アメリカ、メキシコ、白頭山など世界各地の山々や自然などを取材している。山の厳しさを追いついていく。

けてきた岩橋氏が、今回、燕岳を撮影するにあたってテーマとしたのは、「明るく美しく、華のある燕岳」を表現することであったと語っている。一年半という短い取材期間のなか、最大限の成果をあげるために、現場ですぐに結果を確認できるデジタルカメラを駆使、その威力は、小さな高山植物や、夜の星空や月の高感度撮影などでも発揮されている。

巻末には、登山家の田部井淳子氏の燕岳にまつわるエッセイ、東京学芸大学教授で理学博士の小泉武栄氏の北アルプスの地質学的見地からのレポート、燕山荘グループ代表を務める赤沼健至氏の燕山荘の歴史に関する原稿や写真、沿革が掲載され、燕岳を多角的に知ることができる。

厳冬期には一人冬季小屋に残り、撮り続けた岩橋氏の意欲作である本書は、タイトル通り読者を四季折々の燕岳の山頂へといざなう。特に燕岳ファンや、これから燕岳を目指す方におすすめの一冊である

(財津達弥)

図書受入報告(2011年7月)

著者	書名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
近藤栄昭	神山の山(歌集)	185p / 22cm	青磁社	2011	著者寄贈
平野裕也(編)	「登山を楽しくする科学(Ⅲ)」フォーラム	21p / 30cm	JAC科学委員会	2011	当会発行
シュトゥツァー(監修) 末吉雄二(訳)	セガンティーニ (アート・ライブラリー Bis)	246p / 30cm	西村書店	2011	出版社寄贈
坂本直行(著) 高澤光雄(編)	はるかなるヒマラヤ——自伝と紀行	310p / 20cm	北海道出版企画センター	2011	編者寄贈
武部秀夫(編)	遠き頂 ランシサ・リ 6427m	52p / 30cm	岡山県山岳連盟	2011	発行者寄贈
山と溪谷社(編)	実用 登山用語データブック (山岳大全シリーズ 別巻)	288p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
山と溪谷社(編)	クライミング用具大全 (山岳大全シリーズ No.6)	240p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
川崎実	秘瀑——台高山脈 珠玉の溪	287p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈



平成23年度臨時理事会議事録

日時 平成23年6月22日 18時45分より20時30分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、吉永・西村

各副会長、高原・森・

小林各常務理事、節田・

野沢・中山・志賀・古野・

永田・萩原・川瀬各理事、

平井・浜崎各監事、宮崎・

橋本各常任評議員

当臨時理事会は去る6月18日開催の平成23年度第1回通常総会において選出された役員及び評議員による最初の理事会であり、尾上会長から冒頭次のようなあいさつがあった。

「去る18日の総会においてご意見ご批判等をいただきましたが、長時間における熱心な討議を経て議案についてはご承認をいただけたことに感謝を申し上げます。」

報告

厳しい情勢下ではありますが、理事会構成の皆さまとともに平成24年4月1日付公益法人化を目指して認定申請に向けた実務諸作業を強力に推進していきたいと思っております。過去2年間取り組んできた「公益法人への移行」に加え、「若年層を中心とした会員増の取り組み」、「支部の活性化」、「山の日制定」のためにそれぞれ4つのプロジェクトを立ち上げて、強力に推進してきたところであります。お陰をもちまして公益法人化は会としての意思統一がなされたところでありますが、掲げた他の3つの課題はまだまだ道半ばという状況であります。これらについてもより高い成果があげられるよう引き続き向こう2年間、理事会出席者の皆さんならびに会員の皆さんのご協力のもと頑張っていく所存であります。一丸となって持てる力を結集してよりよい日本山岳会を創

つていくためご協力ご支援をいただきたいと考えます。」

次に、出席者全員が自己紹介をした。

審議に先立ち、会長から会務運営にあたり基本方針・指針についての以下の説示があった。

・基本方針について

①公益法人認定申請に向けて粛々と取り組み推進する。

②JAC改革を推進する。

改革については過去10年間ほとんど手つかずの状況にあると言っても過言ではない。膿、綻びが生じて課題が山積している。つまり、財政の問題、委員会運営のマネリ化・硬直化、事務局の運営体制と就業規則の整備・適正化等々、いずれの改革も内容のある改革にしていくことが求められている。改革の推進と並行して若年齢層会員の増獲による会員増強も推進していきたい。

・具体的対応について

従来の4つのプロジェクトに新たに2つのプロジェクトを設置したい。1つは「ルーム検討PT」(第5番目のPT)、もう1つは「震災復興支援PT」(第6番目のPT)で、これは現在の災害救援募

金委員会を発展的に改編するものではあるが、これらの2つのPTを加えて、6つのPT体制で運営し、各チームリーダーのもと、参加する者全員が真摯に取り組んでいただきたい。

公益法人認定申請作業については、申請作業とともに諸規定の変更、整備に取り組んでいただきたい。震災復興支援PTについては、7月中には何とか方向性を見出していかねばと考える。さらに、重要なことだが、第7のPT、つまり、「組織運営と財務の適正化」をその対象に捉えたPTである。このPTは、理事全員がメンバーとして参画する形で強力に推進したい。

各委員会に対する担当理事については、本日の審議事項議案のとおり。また、各プロジェクトチームの担当理事とリーダーも別紙の議案のとおりである。メンバーについては広く会員から適任者を選定していただきたい。

【審議事項】

1・副会長の序列(会長)

会長不在等の場合における会務の円滑な執行を図るため、副会

長の序列を吉永、西村の順番とする。
(承認)

2・常務理事の選任 (会長)

互選の結果、高原理事、森理事および小林理事を選任した。(承認)

3・理事の委員会担務 (高原)

①委員会担当理事

委員会名	担当理事
財務委員会	西村、小林
総務委員会	西村、高原、永田
インターネット小委員会	(同右)
山岳編集委員会	節田、萩原
会報編集委員会	(同右)
英文ジャーナル委員会	(同右)
図書委員会	節田、中山
図書管理委員会	(同右)
学生部指導委員会	古野、野沢、中山
青年部委員会	(同右)
指導委員会	(同右)
医療委員会	森、志賀
科学委員会	(同右)
自然保護委員会	(同右)
資料映像委員会	吉永、川瀬
海外委員会	(同右)
山岳研究所運営委員会	森、中山
集會委員会	(同右)

②PT担当理事とリーダー

プロジェクト名	担当理事	リーダー
山の日制定PT	西村	成川
JACユースPT	森	野沢
支部活性化PT	高原	宮崎
新法人移行PT	吉永	佐野忠則
ルーム検討PT	森	山本良三
復興支援事業PT	高原	宮崎

(①、②ともに承認)

4・事務委嘱 (高原)

小林常務理事に日本山岳会本部所在の千代田区四番町5番4号の「サンビュウハイツ四番町」の管理組合の理事を向こう1年間委嘱すること。(承認)

5・理事会の付託事項 (高原)

常務理事会(構成員)会長、吉永・西村各副会長、および高原・森・小林各常務理事)に次の事項について専決承認し、理事会に報告をする。

①後援依頼・名義使用依頼

②JACロゴマーク使用許可

③図書の引用、貸出許可

④関係団体、支部等の開催行事への派遣役員の選任 (承認)

6・支部会費徴収 (高原)

越後支部から支部会則第7条を改正し、支部年会費1000円を徴収する(ただし記述は、内規

にて定めることになった)。(承認)

7・議事録署名人 (高原)

理事会議事録署名人を出席理事1名に依頼し、今回は永田理事に。(承認)

8・理事会書記 (高原)

総務委員、北原孝浩(No.14065)に依頼する(従前も同人担当)。(承認)

【報告事項】

1・ウェストン祭協力への礼状 (高原)
信濃支部から6月9日付でウェストン祭への協力に対する礼状があった。

2・九州5支部合同集会への講師派遣礼状 (高原)
同集会幹事支部の熊本支部から6月11日付で講師派遣(宮崎副会長)に対する礼状があった。

3・東日本大震災への募金報告 (高原)
中華民国山岳協会から6月10日付で募金NT\$40万4000集まり、日本交流協會台北事務所経由、日本赤十字會へ贈呈した旨の連絡があった。

4・大台ヶ原・大峰の自然を守る会からの「尾瀬東電所有地国有化」

要望依頼 (高原)

同会(会長)田村義彦No.5510)から6月4日付で「尾瀬東電所有地国有化」要望書を総理大臣および環境大臣あてに出した、との連絡があった(JACも同様の要望書を出してはいかかとのことである)。

5・雁部貞夫会員「第13回島本赤彦文学賞」受賞報告 (高原)
島本赤彦研究会(会長)小口明氏から6月11日付で雁部貞夫会員(No.6188)が受賞した旨の連絡があった。

6・転載許可願 (高原)
大町山岳博物館から6月12日付で「山岳」第36年第2号掲載の図版「飛驒新道概念図」を同博物館発行「山と博物館」第56巻第6号に転載許可願があった。常務理事会で許可済み。

7・委員長会議 (高原)
7月29日(金)ルームで開催する。

8・山岳4団体役員懇談会 (高原)
日本勤労者山岳連盟から7月12日開催する旨の案内があった。

9・「安全のための知識と技術」講座案内 (高原)
日本山岳ガイド協会から6月17日付で講座開催の案内があった

(開催は6月24日18時30分～20時30分、東京新宿区四谷区民ホールにて)。

10・「携帯トイレ使ってみだけD AY」案内(高原)

岩手県環境生活部自然保護課から6月10日付で早池峰国定公園において携帯トイレ普及推進の案内があった。

議事終了後、理事会開催時刻を30分繰り下げの提案があり、7月度理事会から開催を午後7時からにすることを申し合わせた。

平成23年度第4回(7月度)理事会 議事録

日時 平成23年7月13日 19時より21時30分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、吉永・西村

各副会長、高原・森・

小林各常務理事、野沢・

中山・永田・萩原・節田・

志賀・古野・川瀬各理事、

平井・浜崎各監事、宮崎・

橋本各常任評議員

議事に先立ち尾上会長から以下の通り発言があった。

先の平成23年度第1回通常総会における定款の審議に関して、原案にこだわったことにつき一部の会員および理事の方からなぜか?とのご意見・ご批判をいただいているので、ここであらためてその意とするところを申し上げたい。

今回の定款案は主務省(公益認定等委員会)から示されたモデル定款に準拠して作成し、事前にチエック、指導を受け、いわば「お墨付き」のものであった。「て、にを、は」等の修正すら難しい状況にあった。これは役所として全国の多数の法人を管理監督する上での基準として起因しているからであろうかと考えている。つまりわれわれ日本山岳会もその埒外ではなく、モデル定款から逸脱することが一切できないことである。加えて、理事会、評議員会において全会一致で承認をいただいて総会議案として諮った経緯がある。また総会では動議が認められないことでもあった。役員任期等についていろいろご意見を頂戴したが、それらは細則で規定して柔軟に対応していきたいとの考えだ。今後の新法人認可申請等の

手続きを考えた場合、平成24年4月1日付公益法人化はぎりぎりのタイムリミットである。どうかご理解をいただきたい。

続いて西村副会長(総務・財務担当副会長)から常務理事会において会長が会務執行するにあたり喫緊の課題としている戦略的課題に関して、すべての理事が参画する下で「組織運営の改善」と「財務の健全適正化」の2点について具体的に問題点を指摘し、その改善・対応策の提案等の説明があった。とくに23年度の事業計画および予算については先の総会で決定をみているものの、その執行推進に際しては総務担当・高原常務理事および財務担当・小林常務理事との緊密な連携・協議のもと各理事とも問題点を共有して一丸となつて見直しを図っていきたいとの決意表明があった。

また、吉永副会長(新法人移行PTリーダー)から、公益法人認定申請を10月に行なう方針で諸作業の準備に着手した。諸規程(案)を各委員会に示すので8月末までに検討願いたい。規程の形式については法律に準拠した形式に合わせ、各規程の整合性を図るのでP

Tに任せてほしいが、その具体的内容については委員会で見直しをしてほしい。最終的には規程集を作っていくことになる。定款、定款施行細則および支部に関する規程は総会で決定するが、その他の新法人に対応する規程および要領はすべて理事会決定事項になり、内規とか覚書は一切廃止することになるとの説明があった。

【審議事項】

1・海外登山基金審査(萩原)

平成23年度海外登山基金審査委員会(前期募集分)は7月8日に開き、助成先を次の2隊に決定した。

①JAPAN納木那尼峰Expedition2011 ナムナニ峰7694メートル(中国チベット自治区)、未踏の南東壁からの登頂。平出和也、谷口けい(2名)、30万円

②チームあへん Patagonia Expedition2012

フィッツ・ロイ山群(パタゴニア)、フィッツ・ロイ南東壁正面新ルート開拓、既成ルートのフリー化。横山勝丘、馬目弘仁、岡田

康(3名)、25万円 (承認)

2・定款、細則の見直し(総会で

の提案に対して)(高原)

先の総会で提案のあった①役員
の任期(新定款第30条)②役員
年齢(新細則第9条)③「山岳環
境」の用語(新定款第4条第1項)
④会員資格復活(新細則第5条)
⑤終身会員(新細則第2条)⑥そ
の他については、今後慎重に審議
する。

3・清里北沢美術館利用について
(継続審議)

秋山泉会員(No.11823)山
梨県山岳連盟会長)から山梨県
北杜市高根町にある「北沢美術館
の建物(約100坪、鉄筋コンク
リート2階建て、借地)を日本山
岳会で利用できないかとの照会、
情報提供があった。調査、検討す
る。

4・義援金利用提案(高原)
(継続審議)

大谷司福島支部長から震災義
援金利用方法について7月4日付
で提案があった。

提案内容は、福島県内の山地
(高地)の放射線量の計測を支部員
で行ないたい。測定機器(線量計)
5台を購入貸与してもらいたい。

(復興支援プロジェクトで検討)

**5・公益法人申請支援業務費の計
上**(高原、吉永)

当該監査法人については公益

法人申請支援業務に加え、区分経
理関係等の指導も含めた支援業務
費である。見積金額は100万円
(値引き20万円、消費税別途)で
ある。委託先は太陽ASG有限責
任監査法人(総括代表社員 吉川
正幸II公認会計士、当会会員No.
7345)である。7月19日付に
て委託契約を締結する。(承認)

6・会員名簿(高原)

現在の会員名簿は2008年
9月に発刊したものであり、3年
が経過しようとしている。発刊後
の新人会員(2010年10月入会
者まで)分を別冊子(補追版)に
して会員に配布した。改訂版発刊
には多大な経費が必要となる。広
告掲載による発刊コスト圧縮の考
え方もあるが、個人情報流失の問
題が懸念される。また電子デー
タ化してはどうか等の考え方もある。

(継続審議)

**7・NHKグローバルメディアサ
ービスからの気象予報案内のHP
掲載**(高原)

当会が独自に実施している春
山・冬山天気予報等との兼ね合い
もありHPに常設として掲載せず
に、こういった情報案内(会員サ
ービス、有料)があることを何ら

かの手段で知らせる。(一部承認)

【報告事項】

**1・文科省競技スポーツ課に総会
報告**(宮崎、高原)

6月29日に総会報告を行なった。

2・遠藤靖彦山梨支部長の意見(高
原)

6月21日付で、総会付議事項に
ついての続きのあり方、支部長
会議のあり方、重要案件に関する
地方会員(支部員)の意見集約の
あり方等々についての意見書が届
いた。今後の会務運営、支部およ
び支部会員について検討する際に
参考になると考えられ原文のまま
披露した。

**3・秋田支部平成22年度事業報告
および平成23年度事業計画の冊子
欠落**(高原・永田)

先の支部長会議資料で標記資
料に欠落があった。次回の事務局
担当者会議で追補を行なう予定。
秋田支部に謝罪した。

**4・大台ヶ原におけるニホンジカ
捕獲実施通知**(高原)

近畿地方環境事務所から6月
21日付で、「わな」による捕獲を
実施するが、わな周辺には注意標
識を設置するので注意願いたいと

の連絡があった。

**5・新制度移行に関する説明会案
内**(高原)

文科省競技スポーツ課からあ
ずさ監査法人主催で7月28日に実
施する掲記の説明会案内が送付さ
れた。当会から出席予定。

6・「スポーツ基本法」成立案内
(高原)

文科省競技スポーツ課から昭
和36年制定のスポーツ振興法が50
年ぶりに全部改正し、スポーツ基
本法が成立、6月24日に公布され
たとの連絡があった。

7・節電協力依頼(高原)

文科省競技スポーツ課経由で
経産省資源エネルギー庁からの節
電協力依頼要請状が送付された。
8・映画『ヒマラヤ 運命の山』
の案内(高原)

標記があった。

9・田淵行男記念館企画展等の案内(高原)

田淵行男写真展(7月6日〜10月23日)ほかの企画展の案内があった。

10・同好会・同期会連絡会議の本年度開催中止(高原)

今期の同好会・同期会連絡会議の開催は、諸般の事情で中止する。必要事項の連絡等はメールで連絡する(代表、連絡先変更等)。

11・日本登山医学会学術集抄録集(高原)

6月11〜12日開催の日本登山医学会学術集抄録集が届いた。

12・エベレスト映像使用許可願(高原)

(株)NHKエンタープライズから「The Epic of EVEREST」(英国登山家マロリーのエベレスト登山、大正13年)の使用許可願があり、資料映像委員会にて了承済み。

13・委員長会議の開催(高原)

7月29日18時30分からルーム

104会議室にて開催する。
14・臨時支部事務局担当者(会計担当)会議の開催(高原)

9月10日(土)11時〜16時、本会で標記を開催する。

15・年次晩餐会の開催(高原)

本年度の年次晩餐会は12月3日(土)、品川プリンスホテルで開催する。

16・会報『山』7月号編集報告(神長)

ルーム日誌
7月

1日 総務委員会

2日 土曜懇話会

4日 総務委員会 高尾の森づくりの会

5日 図書委員会 スケッチクラブ

6日 集会委員会 みちのり山の会

7日 常務理事会 学生部 J A C Y O U T H P T

8日 海外登山基金審査委員会

山岳地理クラブ

11日 資料映像委員会 スキークラブ

12日 総務委員会 海外委員会

13日 緑爽会 九五会

14日 理事会 山想倶楽部 休山会

14日 会報編集委員会

15日 復興支援事業 P T

16日 資料映像委員会

19日 山岳研究所運営委員会 新

法人移行 P T 00会 ス

スキークラブ

20日 青年部 三水会 つくも会

21日 科学委員会 図書管理委員

会 フォトクラブ

25日 J A C Y O U T H P T

フォトクラブ

26日 ゆきわり会

27日 自然保護委員会 麗山会

28日 山遊会

29日 委員長会議

30日 土曜会

7月来室者508名

会員異動(7月)

物故

保坂 一 (2985) 11・7・24

加藤幸彦 (5181) 11・7・17

小原晴子 (5458) 11・7・7

仲俣新一 (9867) 11・7・19

古谷二郎 (12687) 11・5・23

三宅國男 (13690) 11・7・4

金中利和 (13939) 11・7・22

退会

清野 務 (8509)

錢本隆行 (13500) 海外

栗林紀子 (13133) 東京多摩

齋藤賢一郎 (13958)

義援金の送り先と情報提供のお願い

義援金の用途は、被災会員見舞金・被災3支部見舞金・日本赤十字寄託の3つとしました。

災害地域の支部を通じ被災会員状況を調査していますが、支部に属していない会員で被災された方、あるいは知り合いの方の情報を探しております。

なお、見舞金の対象は、自宅の全壊・流失・半壊等とこれに準じる被災をされた方です。

情報は、当会事務局あて被災状況のメモと連絡先を明記し、メール(jimukyoku@jac.or.jp)かFAX(03-3261-4441)をお願いします。

復興支援PT 宮崎紘一

◆パタゴニアトレッキング12日間

集委会

日時 2012年2月2日(木)～14

日(日)

日程 アルゼンチン～カラファテ

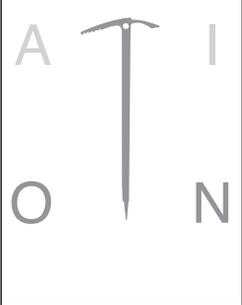
(パイン国立公園 トレット

キング2回)～ペリノモレ

ノ氷河～エル・チャルテ

ン(ロス・グラシアレス

インフォメーション



国立公園 トレッキング

3回)～アルゼンチン観光

(1日)

定員 15名

費用 約55万円(燃油チャージ等

別) 三井吉由江(TEL)090

1780617601 FAX

031345115388

msum@cyberoz.net

◆山里寿男 傘寿記念展

ベテラン作家、山里寿男氏の傘寿記念展です。詩情深く、憶いこめられた佳作が、新作中心に展示されます。

会期 9月11日(日)～17日(土)

時間 11時～18時30分(最終日は

16時30分まで)

会場 ギャラリームサン(中央区

銀座1-9-1 KIBIL

1F TEL 03135641

6348)

◆第15回森の勉強会(再案内)

関西・京都・東海支部共催

森林認証制度のもとに、持続可能な豊かで美しい環境管理型林業経営について学ぶ。日程などの詳細は、6月(793)号インフォメーション欄を参照ください。

日程 10月22日(土)～23日(日)

場所 三重県紀北町「速水林業」

費用 1万8000円

定員 30名(先着順)

申込 9月10日までに、東海支

部の川合鋁一(〒441-0874愛

知県岡崎市竜美南3-3

11 FAX 05641511

8916)

■東日本大震災義援金の寄金者追加とお名前の訂正②

6月号掲載の義援金を送られた方々のリストに追加と訂正があります。

【追加】「越田和男」さんのお名前が漏れていました。

【訂正】谷口定樹は「谷口定樹」

さん、贇田美江さんは「贇田統

亜」さん、中華民国・逆溪協会は「溯溪協会」の間違いでした。

お詫びして訂正します。

救援募金委員会

◆編集後記

●今月は山の映画と絵に関する記事が重なりました。特に映画は、『アイガー北壁』など佳作が続きます。こうした文化的な活動も、巻頭に書いていただいた「自然保護」と同様、山岳会の果たしてきた大きな柱のひとつだと思います。●さらに映画や絵と同様、図書や写真なども、私たちが大切に育てていかななくてはならない「山の文化」です。しかし、最終ページの広告にあるように、山岳図書販売の老舗である茗溪堂が、書籍の販売をやめました。読者として大変残念に思います。

●6月に臨時理事会が開かれ、今月は会務報告に多くのページをさきました。従って「大学山岳部の復活奮闘記」などは次号に送りま

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 795号

2011年(平成23年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上昇

編集人 神長幹雄

E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社